

フランスの家族における人間関係

浜 名 エレーヌ

はじめに

フランスの家族における人間関係を論じる前に、まず一般的に家族とはどういうものかを考えておくべきだ。

人類学者のレヴィ＝ストロースが1983年に書いた『はるかな視線』¹⁾という本には、家族に関して、次のような定義がある。

- 1) 家族というものは結婚から始まる。
- 2) 家族は夫と妻と、その子孫からできている。

どんな国でも、家族というものは、歴史や社会の変化の影響を受け、時代とともに変わる。したがって、家族における人間関係も時代とともに変わると言ってよいだろう。

12世紀から1789年のフランス革命にかけて、カトリックの国フランスでは、夫婦は神様によって結ばれていた。そういう結婚は解消できない(婚姻の非解消性は20世紀後半まで続く)。結婚の目的は2つあった。

第1に、子孫を残すこと。

第2に、経済的に、2つの家族を結ぶこと。

この講演では、以上のような歴史をふまえて、家族の構成員、すなわち夫・父親、妻・母親、そして二人の間に生まれた子供の地位の変化を考えてみたい。これから取り扱う家族像はブルジョワの家族だけで、ここでは農民と労働者の家族像は取り扱わない。

父親、母親対子供、夫対妻

中世から18世紀までフランスでは、フィリップ・アリエスの言う「旧家族」と呼ばれるモデル²⁾が一番多かった。その家族の特徴は、父親は神様のような存在であり、強大な家父長権を持っていた。妻に関して言えば、妻は完全に夫に依存し、従属すべき存在だった。

金持ちの家庭を除いて、18世紀まで、子供は働く力として価値を与えられていたが、未完成の人間としてみられていた。

エリザベート・バダンテールの『母性本能の神話』によれば、児童期と青年期の時期はない。子供は7才ぐらいになると家庭から外に出され、大人の社会にほうり込まれる。

しかし、18世紀の哲学者ルソーの女性や子供や家族についての思想、そして1789年のフランス革命の影響で、子供の存在が大事になってきた。

また、18世紀の半ばまでは大家族が一番多かったが、次第に小家族が現れてきた。近代的家族の始まりと言えるだろう。

19世紀に、上流社会では、妻も、子供も、相変わらず夫や父親の権威に依存している。妻は

まるで子供のように扱われている。

20世紀の第一次世界大戦では、夫が出征してしまったので、戦争が終わるまで一人で家族を守ってきた女性の地位が家庭のなかで大きく変化し、強くなってきた。自由と責任感を味わっていた女性は家庭のなかで、特に夫に対する、新しい役割を果たしたい。ところが、家のなかでいくら地位が変わり始めたとしても、社会的には、1960年代くらいまでは、法律上は、女性は、夫に対しても、自分の父親に対しても、19世紀と同じように、子供、すなわち「未成年」として扱われている。例えば、法律が変わり始めた1965年までは、外で働くにも、銀行口座を開くにも、夫の許可が必要だった。

そういう伝統的な家族では、夫と妻の関係は不平等な関係にある。経済的にも、法律的にも、権力はすべて夫にあるわけで、経済的に独立していない、専業主婦である妻は、完全に夫に依存していた。

母親は、子供に対して、権威を全然持っていなかった。子供の教育の面でも、子供の私生活の面でも、父親は昔と同じように家父長権を持っている。子供に関して言えば、息子であれ、娘であれ、21才まで（成年まで）「父親に従うべきだ」というのが一般的だった（結婚するには、父親の許可が必要だった）。子供と親の間に、コミュニケーションも、信頼感もないというのが実情だった。

家族は、当時の強い父権社会を反映していた。1958年から、大統領は、フランスをナチス・ドイツから解放したド・ゴール将軍だった。「まさに、国家の父だった」と浅野素女は書いている。

ところが、家族のレヴェルでも、社会のレヴェルでも、若者の不満がたまっていた。1968年5月に、家族、学校、政府の権威主義と古いモラル、特にカトリック信仰に反対し、自由を求める学生運動が始まる。

5月革命は短かったが、ド・ゴール将軍を追い出して、フランス社会にも、家族にも深い影響をおよぼした。

浅野が書いているように、

「革命というからには、その前と後には完全な断絶がある³⁾」のだ。

5月革命の結果

1960年代にアメリカの影響で始まったフェミニストの運動と5月革命のおかげで、法律上、女性が、だんだん、男性から解放されるようになる。以下に女性解放の主な出来事を記す。

1967年：経口避妊薬が（ピル）合法化される。

1975年：妊娠中絶も、条件付で（10週間以内、医者が拒否することができる）、合法化される。

家族に関しては、

1970年：父権が廃止され、親権が設定される。

1975年：民法が改正され、協議離婚が認められる。

共働きが広まって、経済的に夫に依存しない女性、さらに自分で避妊をコントロールできる女性は強くなり、独立できるようになってくる。

5月革命の結果の一つとして、1970年代からは、婚姻数が減り始める。若者たちは「愛というのは根本的に個人的なことだ」と思っているので、社会の契約や書類、つまり形式的な結婚

は必要ではないと考えるようになったのだ。マルティヌ・セガレンの言い方によれば、結婚というのは、嫌われていた社会の代表として拒絶される⁴⁾。

その代わりに、法的な結婚をせずに、コアビタシオン (cohabitation) つまり同居を選ぶカップルが増えてきた（ここではわざと、「同棲」という暗いイメージのある言葉を使わない。なぜかという、フランスでは、「コアビタシオン」という言葉は悪い意味を完全になくしたからだ）。そういう関係は安定していて、同居するカップルはまるで結婚している夫婦みたいな生活を送っている。

同居は、現在では、親にも、社会にも 完全に認められている。ジェラルド・メルメの2001年版「フランス白書」によれば、フランス人の57%にとっては家族になるために、結婚するのは必要なことではない⁵⁾。

1990年に結婚していないカップルは150万組いましたが、1998年にその数字は240万組に上った。

同居率を調べてみると、

1962年：2.9%
1975年：3.6%
1985年：7.4%
1990年：12.4%
1998年：16.3%

という具合に増えていることがわかる。

5月革命直後、昔の道徳がまだ残っていたときには、同居していたカップルは、子供がほしくなったとき、あるいは子供ができたとき、法律上の結婚をするようになった。しかし、今日、古いカトリックのモラルやルールは社会にほとんど影響が残っていない。子供をつくるために結婚するというようなことはもはやしないのだ。

結婚していない親も社会に認められ、婚外で生まれた子供に対してもフランスでは偏見がない。さらに、法律上、婚外で生まれた子供は婚内で生まれた子どもとまったく同じ権利がある。婚外出生率は以下の通りである。

1967年：6%
1979年：10%
1990年：30%
1998年：40%

同居と同時に、1972年から、離婚率が増えはじめた。

1998年：100組の結婚のうち、41組は離婚に終わった。

また、同居と婚外出生と同じように離婚も社会に認められてきた。

小学校のクラスで「離婚している親は？」とたずねれば、3分の1の子供が手を上げると言われている。

今日、家族とは何か？

前述の1983年のレヴィ＝ストロースの伝統的な家族の定義と現在の家族の実際のすがたは大きく異なっている。この10年、20年の間の、変化がそれほど大きいということだ。

今は、様々な家族像が同時に存在しているところに特徴がある。

1) 結婚している、伝統的な家族

2) 非婚家族

3) 子供と一人の親（普通、母親）でできている片親家族（離婚率が高いので、そういう家族のタイプが増えてきた）

4) 浅野が「複合家族」と呼ぶ再構成家族つまり再婚した家族というタイプがある。

新しい家族の定義を考えたら、ブリュノ・デコレの『家族』という本には、次のような様々な定義が載っている。

1) 「住むところに基づいている家族」。家族というのは同じ家に住んでいる大人と子供からできている。

2) 「愛情に結ばれている家族」。家族というのは別性の大人と、その大人が育て、愛する子供からできている。

3) 「経済に基づいている家族」。家族というのは消費する世帯だ。

4) 「法律に基づいている家族」。家族というのは相互的に義務と権利に結ばれる親と、親が育てる子供からできている。

5) 「遺伝に基づいている家族」。家族というのは女性と男性と、その二人の子孫からできている。

要するに、現在の家族像は複雑で、伝統的な家族と違って、様々な有り方がある。

現代の家族における人間関係

親子関係

フランス人の50%にとっては幸せな人生にはやはり子供が必要である。子供は親の愛の結晶だからだ。

フランス国立統計経済研究所（INSEE）によると、1999年に、フランスの女性一人あたりの出生率は1.77だった。

様々な調査によると、どんな家族のタイプにおいても、親子関係はよいと言える。

父親は、母親と同じ程度に育児に参加する。父親は権威だけを表したくないので、子供と親密な関係を持つように努める。

家庭内の理想的な教育はコミュニケーションと相互の信頼に基づいている。したがって、小さい子供に対して、父親と母親の役割は同じになる傾向がある。

親は子供と親密であるが、子供にいろいろな価値を伝えたいと思う。その伝えたい価値のなかでは、自由、責任感そして他人の尊重が重要である。「他人の自由が始まると、自己の自由が終わる」とよく言われている。

そういう意味では、親も子供もお互いに尊重すべきだ。親にはプライバシーが必要である。子供は勝手に親の寝室に入り込んではいけない。子供に対して、親も同じプライバシーのルールを守るべきだ。例えば、子供の手紙や日記などを勝手に読んではいけない。

また、家族は家族の決まりをつくる。子供がその決まりを無視すると、親が自分を罰するはずだということを子供自身がよく知っている。

他者を尊重するとともに、社会において楽に生きていけるように、親が子供のしつけをするのだ。

今の親は、子供に近いが、80年代の親と違って、子供の友達ではなくて、ちゃんとした親の役割を果たしている。実は、親の権威が今の子供たちに評価されるようになってきたと言われている。

そういう厳しい教育にもかかわらず、成長した子供がかなり遅くまで親と一緒に住むのが今の傾向だ。『フランス白書』によれば、20-23歳の男の71%と女の51%が親と住んでいる。その現象には様々な理由がある。親子関係がよくて、相互的な信頼感に基づいている以外、勉強の期間は長くなり、勉強が終わったとしても、若者の失業率が高いので、就職するのは難しいという理由を挙げられる。

カップルにおける男女（夫婦）関係

新しい家族の特徴は共働きで、25歳から54歳までの女性の4分の3は仕事をしている。

子供が生まれても、女性は仕事を止めない。しかし、働いている女性は、特に子供がいれば、家事に費やす時間はあまり残っていない。家事の分担に関しては、男は以前よりも家の仕事に参加しているが、まだ家事の分担は平等ではないと言える。

1990年のヨーロッパ連合の調査によると、家事の分担は次のようだ。

男が参加する家事

買い物 : 48%

お皿洗い : 48%

子供の送り迎え : 49%

料理 : 37%

掃除 : 35%

今日の女性は、毎日、家事に4時間30分かけているのに対して、男性は2時間40分しかかけていない。

毎日の家庭生活に関しては、分担はもう少し平等だ。育児は平等に行われるが、子供が大きくなったら、学校などの問題については「お父さん」は「お母さん」に任せる。その意味では、お母さんは子供に対して、お父さんより強い（離婚の場合：85%の場合、母が子供を引き取る）。家族の大事なことにに関しては、夫婦が（子供と一緒に）共同に決定する。

カップルの人間関係は、愛に基づいている。男と女の関係と親の関係ははっきり分かれていいる。カップルは自分の寝室を持ち、自分のプライバシーを守っている。

結 び

フランスの家族における人間関係について今まで述べたことをまとめると、最も印象的なのは、1968年からの急激な変化だ。30年の間に（70年 - 2000年）、フランスの家族は、それまでの9000年の間よりも、たくさんの変化を受けたのである。

父親の地位も、夫の地位も、男の地位も急激に変わり、低くなった。

同時に、母親、妻、女の地位は、役割も大きく、強くなった。

昔、存在そのものが認められていなかった子供が親と社会の宝物になった。

かつての家族における人間関係は不平等で、縦の関係であったが、それが平等で横の関係に変わった。

この30年間、権威を失ったので、一番損したのは男だと思われるけれども、怖い存在から愛され、信頼される存在に変わってきた。

また、女は強くなり、やっと父親にも、夫にも依存せずに、独立できるようになったが、その新しく得た独立と自由と引き換えに、責任も増え、負担も増えた。

長い歴史を考えると、おそらく、一番幸せになったのは子供であるかもしれない。というの

は、18世紀まで存在さえ認められなかった子供、それから1970年代まで、父親の権威に従うべきであった子供は、今日の社会とその親の宝物になってきたからだ。

注

- 1) Claude Lévi-Strauss, 1983, *Le regard éloigné*, Plon.
- 2) Philippe Ariès, 1913, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*, Le Seuil.
- 3) 浅野素女『フランスの家族事情』岩波新書, 106ページ。
- 4) Martine Segalen, 2000, *Sociologie de la famille*, Armand Colin, p.131.
- 5) Gérard Mermet, 2001, *Francoscopie 2001*, Larousse.

参考文献

- ARIES Philippe, 1973, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*, Le Seuil.
- CASTELAIN-MEUNIER Christine, 1998, *Pères, mères, enfants*, Flammarion.
- CHEBAUX Françoise, 2001, *30 mots de Françoise Dolto à l'usage des parents et des éducatifs*, 2001, Presses Universitaires de France.
- DECORET Bruno, 1998, *Familles*, Economica.
- GOODY Jack, 2001, *La famille en Europe*, Le Seuil.
- GUILLOU Sophie, 1999, *Pour une nouvelle autorité des parents*, Editions de Milan.
- LEVI-STRAUSS Claude, 1983, *Le regard éloigné*, Plon.
- MERMET Gérard, 2001, *Francoscopie*, Larousse.
- SEGALEN Martine, 2000, *Sociologie de la famille*, Armand Colin.
- THERY Irène, 1998, *Couple, filiation et parenté aujourd'hui*, Odile Jacob.
- 有地 亨, 1981, 『フランスの親子・日本の親子』, NHK ブックス。
- 浅野素女, 1995, 『フランス家族事情』, 岩波新書。